

靴履き等で用いる床に対する心理的序列感に関する研究

正会員 高橋 康代*¹
同 久保田 一弘*²
同 矢島 規雄*³
同 直井 英雄*⁴

靴履き用床材 心理的序列感 一対比較
数量化 類

研究目的

住居内の床に対して我々は「畳が最も上位で、土間や土はかなり下位である。」などと無意識のうちにも漠然とした序列を認識している。これまで当研究室では素足やスリッパ等で用いる屋内の床の格について、このような序列の感覚を定量的に捉えることを試みてきた。今回、靴履き等で用いる床に対しても同様な序列感があるものと考え、新たに靴を履いて歩く屋内外の床を対象に、その心理的序列感を定量的に捉えることを試みた。

研究方法

(1) 対象とした床

屋内は、じゅうたん・板・磁器系タイル・長尺塩ビシート(CF)・Pタイル・モルタル仕上げの6種類、屋外は、石材・タイル・アスファルト・芝生・土・舗石ブロックの6種類で計12種類の床材を対象とした。

(2) 被験者

床材の特質を認識することができの確な回答を得ることが可能と思われる、本学建築学科学生22人を被験者とした。

(3) 分析方法

以下2つの方法を用いた。

床の序列の上下に関する一対比較評価

12種類の床材に関し、各々他の11種類の床材との格の上下の比較を一対比較の手法によりアンケート調査した。アンケートは、「格が非常に上だと思う」が5点、「格がやや上だと思う」4点、「どちらも同じだと思う」3点、「格がやや下だと思う」2点、「格が非常に下だと思う」1点の5段階で評価した。

床上で行う行為の抵抗感に基づく数量化 類分析

12種類の床材を対象として、表1の4つのアイテムについてそれぞれ表2の6種類の行為の抵抗感を「あまり抵抗がない」が3点、「やや抵抗がある」2点、「かなり抵抗がある」1点の3段階で評価した。なお、「ゴミを捨てる」の抵抗感はその行為と逆方向であるため、評価点も逆方向となるよう与えた。

結果及び考察

(1) 一対比較による床の序列評価結果

12種類の床材の一対比較の結果を図1に示した。ここでは、じゅうたん及び板の格が最も高い評価を集めており、磁器系タイル及び長尺塩ビシート(CF)の格がそれに続いている。

一方、土の格に対する評価が最も低く、アスファルトが次に低い評価であった。なお基本的に屋内の床材の方が格が上であると考えられるがモルタルに関しては屋内にもかかわらずアス

表1 数量化 類分析対象

アイテム	屋内	屋外
床材		
行為		
建物		x
場所		x

は分析対象
xは分析対象外

表2 対象とする6種類の行為

座る	寝転がる	裸足になる
カバンを置く	食べる	ゴミを捨てる
	一度落とした物を拾って食べる	

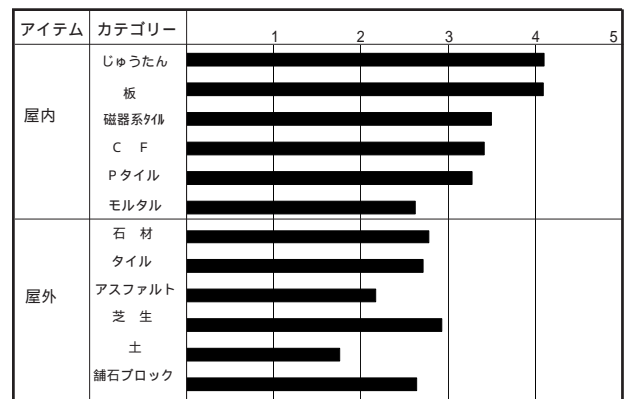


図1 一対比較による床の序列評価

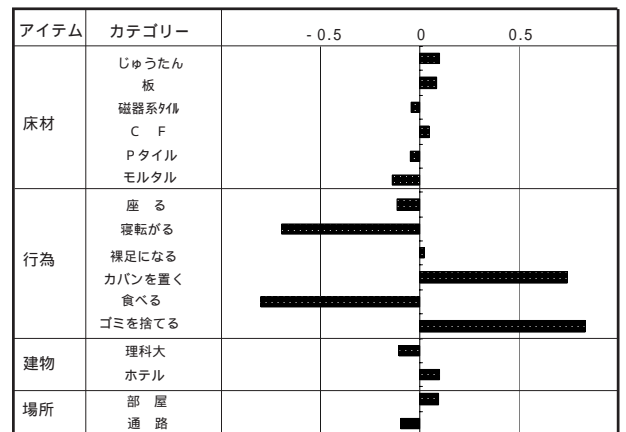


図2 数量化 類による比較・屋内

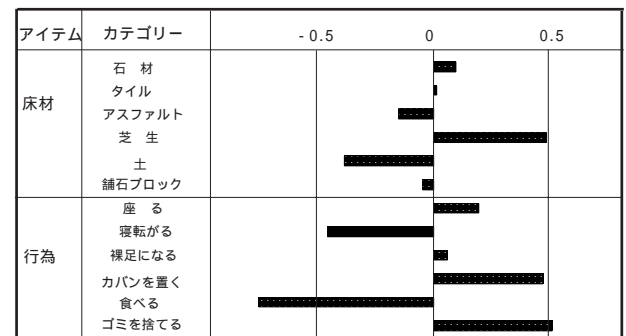


図3 数量化 類による比較・屋外

ファルトに次いで3番目に低い評価であった。また屋外では芝生が最も高い評価を得ている。

(2) 行為の抵抗感に基づく数量化分析結果

ヒトの心の抵抗感という質的な情報を量的に説明するため、数量化 類による分析を行った。その結果を屋内は図2に、屋外は図3に示した。床材・行為・建物・場所を、それぞれいくつかのカテゴリーに分けて分析した結果、屋内においては、床材の種類よりも行為の種類の方が被験者の心理に与える影響が大きいことが判った。一方、屋外においては行為の種類もさることながら、床材の種類が被験者の心理に大きな影響を与えていることが判った。中でも特徴的なのは芝生が屋内、屋外すべての床材の中で、行為に対する抵抗感が最も低いという結果が得られた事である。これは幼少期から芝生の上で遊んだり、座ったり、寝転がったりした経験を持つことが多い為このような結果になったのではないと思われる。

(3) 上記2種の結果の比較

一対比較の順位と行為に対する抵抗感から導かれた格の順位は、唯一屋内の長尺塩ビシートと磁器系タイルの順位が逆転しているもののそれ以外はすべて一致した。順位が逆転した磁器系タイルは行為に対する抵抗感が長尺塩ビシートのそれと比べ、素材から受ける冷たい感覚が抵抗感を増大させたと思われる。

(4) 被験者の評価傾向に関するクラスター分析結果

アンケート結果から、さらにクラスター分析を行った。一対比較、屋内での行為に対する抵抗感及び屋外での行為に対する抵抗感の3つの分析の中で、ここでは特徴的な結果が得られた屋外での行為に対する抵抗感についてとりあげた。

図4で示すように、被験者は大きくAとBに分けることができ、Aグループは平均的な値に近く人数的にも多数を示している。一方Bグループは図5で示すようにどの床材に対しても抵抗感を感じる事が少ないグループであった。

(5) 行為別にみた床材12種類の抵抗感の比較

6種類の行為の中で、座る・寝転がる・裸足になるという直接肌に触れる行為に対する抵抗感について比較すると、図6で示すように芝生の場合が他の床材と比べて極めて低い事が判った。

カバンを置く行為については、土以外の床材の場合は概ね同程度の抵抗感であり、あまり抵抗が無いと感じられている事が判った。

まとめ

本研究により、各種床材の心理的序列感について一定の知見を得ることが出来た。なお総合的な判断で行われた一対比較の結果と、行為の抵抗感に焦点をあてた数量化 類の結果とが概ね類似であった事から、それらの結果は比較的安定したものであると考えられる。また両結果のわずかな違いから、芝生という仕上げがやや特殊なものである等の新しい知見も得られた。

なお、本研究に際して、昨年度東京理科大学卒研究生、小金澤儀朗氏、西村裕子氏の協力を得た。ここに記して謝意を表する。

参考文献

1. 川村かおり: 仕上材料の違いによる住居床のヒエラルキー感に関する一分析 ; 日本建築学会大会学術講演梗概集 1993
2. 原朝子: 住居内面部位における浄・不浄感の序列に関する研究 ; 日本建築学会大会学術講演梗概集 1997
3. 矢島規雄: 各種住居床に対する心理的序列感の定量化に関する研究 ; 日本インテリア学会論文報告集 15号 2005年3月

*1 東京理科大学大学院生
 *2 東京理科大学補手 工修
 *3 当時東京理科大学助手 工修
 *4 東京理科大学教授 工博

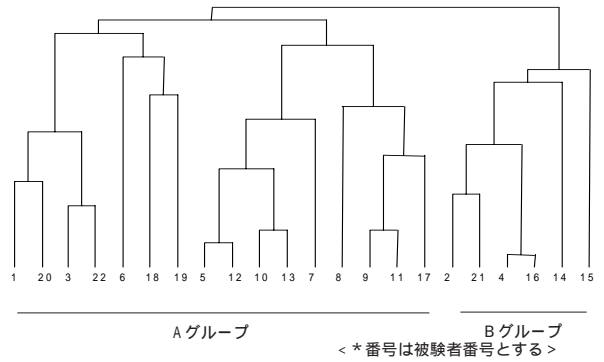


図4 被験者の評価傾向に関するクラスター分析・屋外

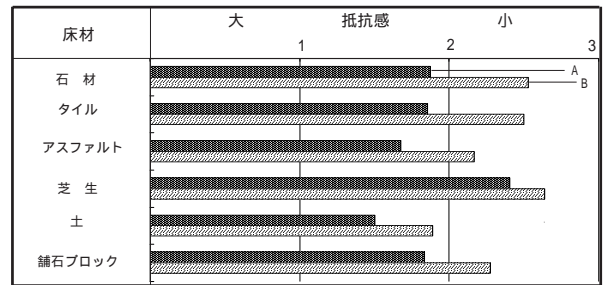


図5 A・Bグループの抵抗感の比較

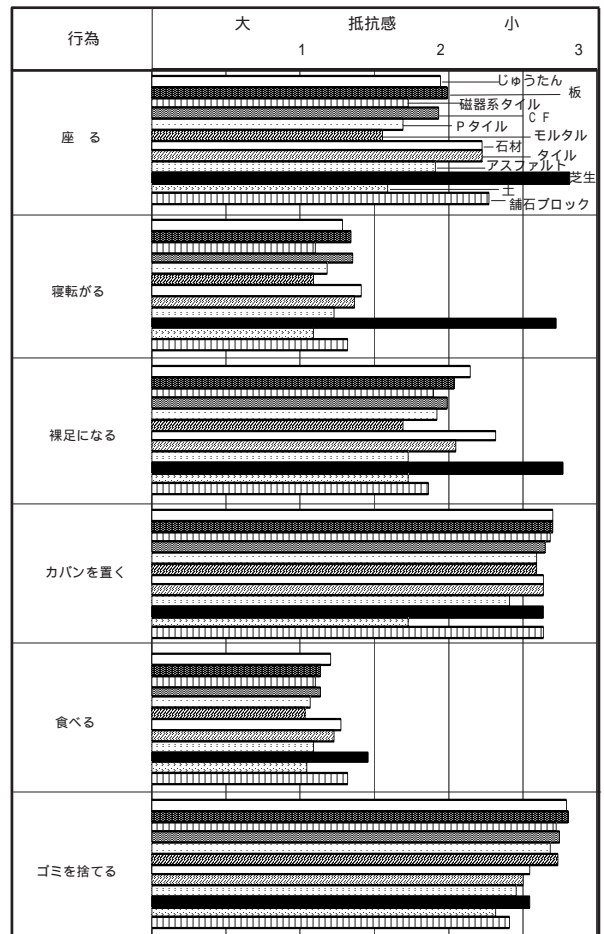


図6 行為別にみた抵抗感の比較

*1 Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science.
 *2 Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science, M.Eng.
 *3 Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science, M.Eng.
 *4 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science, Dr.Eng.